
気ままな傭兵暮らし

シンヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままな傭兵暮らし

【Nコード】

N2777B

【作者名】

シンヤ

【あらすじ】

手違いで異世界に来てしまった不幸な主人公が、傭兵（なんでも屋）として頑張ります。すべては元の世界に帰るため！

召喚される話し（前書き）

初投稿です。こんな駄文ですけど読んでもらえたら嬉しいです

召喚される話し

薄暗い部屋の中に、黒いローブを纏ったいかにも魔法使いっぽい老人と、同じような服装をしたその助手である中年の男がいた。

彼等はこれから、幻獣界に存在すると言われる伝説の黄金龍を召喚しようとしている最中だった。

「魔法陣の方は完璧じゃ。ちゃんと召喚に必要な素材は揃っているじゃろうな。」

老人が助手にそう聞くと、

「もちろんです、かなり苦労しましたよ。」

と、苦笑しながら言った。まあたしかに、この面倒くさがりな助手にしては頑張っていたと老人も思っていた。

この黄金龍召喚は、老人が魔法使いを目指した理由であり老人の夢であった。

念願の夢がもうすぐ叶うと思うと、老人の胸は高鳴ってそのまま天に召されてしまいそうだ。

「では、これより召喚の儀を行う」

その言葉と共に老人が両手を高々と掲げて、何やらブツブツと呟くと、魔法陣が淡く輝き始めた。

そして老人の呟きが終わると同時に魔法陣が急激に輝き、その輝きが終わった魔法陣の中心には、眠った人間の少年がいた。

「なあ、助手」

「なんでしようか」

「これはなんだ」

「少年ですね、人間の」

「正直に言ってみ、怒らないから」

「素材の中にあった、魔龍の爪の入手に失敗したので、代わりに私の爪を入れました」

その後、助手の行方を知る者は誰もいなかった。

これは、おバカな助手のせいで色々と苦労することになる少年の話。

拾われる話し（前書き）

主人公は怒り狂った黒ローブのじいさんに、あるところに捨てられます。呑気に寝たまま。

拾われる話し

少年こと藤沢真也は、身長が特別高いわけでもなく、顔がかっこいいわけでもない普通の17歳の高校生だった。そんな彼は、朝の日射しが眩しくて目が覚めたら、いつの間にか自分の部屋とはまったく違う部屋にいたので少からず混乱した。

（ここどこ？なんでこんな部屋のベッドで寝てたんだ？）

周りを見ると、必要最低限の家具と自分が寝ていたベッドしかない。真也は混乱する頭で、昨日自分は何をしていたかを思い出そうとした。

たしか昨日はいつもどおりに朝起きて、幼なじみの友人達と今年で2年目になる高校に行って、なんとなくやる気を出して授業を受けたから、そのせいで無駄に疲れてしまったので、部屋着に着替えるとそのまま自分の部屋のベッドで寝た筈だ。決してこんな部屋で寝た記憶はない。さらに混乱して、もうわけが分からなくなってきたところで、急に部屋のドアが開いた。「ああ、起きていたのか」

そんなことを言いながら部屋に入ってきたのは、えらい美人さんだった。

整った顔はキリッとした目が印象的で、長い金髪をポニーテールにしているのがとてもよく似合っていた。スタイルも抜群で、出てるとこ出てるし、足も長くていかにも大人の女性って感じがした。その美人さんはベッドに腰を下ろしてから、

「で、どうしてゴミ捨て場なんかで寝ていたんだ」と、わけの分らないことを言ってきた。

「ふえ？ゴミ捨て場？」

思わず間抜け声が出た。一体自分は昨日なにをしていたのか。

途方にくれる話し

「私の名はレイアだ。君は？」

美人さんことレイアさんにそう訊かれたので、

「えっと、藤沢真也です」

と名乗る。

「フジサワシンヤ？変な名前だな」

レイアさんが不思議そうに言っているので、

「シンでいいですよ」

と言っておく、まあ学校ではそうよばれてたからね。

とりあえず僕は、気になっていたことを色々聞いてみることにした。

「レイアさん。僕って本当にゴミ捨て場にいたんですか？」 「ああ、そうだ。最初に見た時はかなり驚いたぞ」

レイアさんの話によると、特に痩せほそっている分けでもないのに、行き倒れにも見えないし、そもそも服装がこの辺りではみられ無いものないので、何か事情があるのかもしれないと思ってわざわざ目が覚めるまで自分の家で休ませてくれたらしい。美人なだけでなくとても優しい人だと思う。

「それってどこのゴミ捨て場だったんですか？」

「この街の中心部にある、噴水広場の近くのところだ」

この返答を聞いたとき、薄々気付いていたけどなんとなく信じたくなかったことが、現実になってしまった気がした。僕が住んでいたところに、噴水広場なんてなかった筈だ。

「レイアさん。この街……じゃなくて、この世界の名前ってなんですか？」

「？そんなことも知らないのか？」

レイアさんは不思議そうに首を傾げたあとに、こう言った。

「この世界の名前はアナザーアースだ」

どうやら僕は、異世界とか言うところに来てしまったらしい。

説明する話し

困った、本当に困った。なんとなくその答えが返ってくるとは予想してたけど、実際に言われると、思わずポカーンとしてしまう。

（ア、アナザーアース？マジで？異世界トリップってヤツですか！？）

僕が余程間拔けな顔をしていたのだろう、レイアさんが怪訝そうにして、

「どうした？大丈夫か？」

と、聞いてくる。参ったな、なんと言ったらいいのやら。

「えっとですね。信じてもらえないと思うのですが、聞いてもらえますか？」

「ん、なんだ？」

「実は僕、違う世界から来たみたいです」

「……………」

こんどはレイアさんがポカーンとしている。正直に言ったのやっぱりまずかっただろうか？普通有り得ないもんな、今の状況。

「……そう、か」

……ありや、思ったより驚いてない。しかもなんか納得した様な顔をしている。

「怪しい二人組が何かを召喚しようとしていると報告を受けたが、それかもしれないな」

召喚？報告？

「なんの話ですか？」

「いや、こっちの話しだ」

まあ今は関係ないか。でも召喚ってなんだろう？

「レイアさん、召喚ってなんですか？」

「召喚というのは、高位の魔術師が使える魔法の一種で、幻獣界、霊界、機界等の別世界から、この世界にその世界の物を転移させる

術だ。転移させる対象は使う素材によって決まるから、強力な力を持った物を転移させたいなら、それなりに高い魔力のある素材が必要になる」

「じゃあ、人間を召喚するのって難しいんですか？」

「いや、人間の召喚はそれほど難しいことじゃないし、使う素材も低位の物ですむんだ。まあ人間を召喚する様なヤツはめったにないけどな」

「どうしてです？」

「人間界は文明を築いていることもわかってるし、この世界より遥かに技術が進んでいることも召喚が使える者なら知っているが、人間一人の力なんて微々たるものだ。わざわざ召喚する者もないだろう。」

いや、召喚されちゃってるのですけど、僕。

「じゃあ、これが一番重要なんですけど。僕って元の世界に戻れるんですか？」

「……それはちょっとわからない。召喚された物は使った素材の魔力がなくなると自動的に元の世界に戻るものだが、シンのような例は今までに聞いたこともない。」

実は、シンヤが召喚された時に使われた素材はどれも一級品だが、助手の爪が他の素材に変な影響を与えて今のような状態になってしまっている。めっちゃ迷惑だ。

「じ、じゃあ僕って、帰れないってことですか!？」

「そうは言っていない。前例がなくなっちゃって、方法が無いわけじゃあないからな。魔法のことなら魔術師に聞けばいいだけだ」

その一言を聞いてシンヤは安心した。しかし、その安心もつかの間、次のレイアの言葉にシンヤは更に不安になってしまう。

「この街に召喚を行える魔術師はいないと思うけどな」

シンの不安はまだ続く。

凄い人な話し

この街に召喚ができる魔術師がない？なんで？

「ど、どうしてなんですか？」

「この街にいる人間は、召喚なんかよりもっと実用的な魔法しか使わないんだよ」

「もっと実用的な魔法？」

「そう、なんとたってここは傭兵の街、ギルドタウンだからな」

〈傭兵の街ギルドタウン〉それがこの街の名前か。でも傭兵って、戦争の時とかに雇われる兵士のことじゃなかったかな。

そのことをレイアさんに話してみると、

「なるほど、そっちの世界で傭兵とはそのような職業なのか。こっちの世界の傭兵とは、魔物の討伐から薬草の採取など幅広く依頼を受け、その報酬で生活する者のことだ」

とのこと。そしてその傭兵達が所属しているのが、この街の名前の由来にもなっている傭兵ギルドだそう。 「じゃあ僕はどうしたら戻れるんですか？何か知りませんか？」

「この街のあるイース大陸の西にある、魔法の技術が一番進んでいるウェート大陸の首都エルトにある魔法研究所なら、何か手掛りがあるかもしれない」

なんだか話しのスケールが大きくなってきた気がするけど、今はそんなこと置いといて。

「じゃあ僕は、そのエルトってどこに行けばいいんですね」

「まあそうなんだが、ウェート大陸に行くには船に乗らなければならないし、なんとかエルトに着いたとしても、魔法研究所に入るこ

とができるのはそれなりに地位の高い者だけだ」

……マジですかあ、やっぱり世の中って甘くないなあ。

そんな風に僕が落ち込んでいると、

が広まれば、魔法研究所に入ることだってできるはずだぞ」

と、いきなり無茶な提案をしてくる。でも急にそんなこと言われましても…ねえ？

「無理ですよー。だって僕この世界のことなーんにも知らないし、武器の扱い方もわからないのに」

「それは大丈夫だ。私がちゃんと教えてやるから」

僕が困ったように言うと、レイアさんは笑みをうかべてそう言ってくれた。でもいくらレイアさんが物知りでも、さすがにそれは無理だろう。しかし、レイアさんはまたまた僕を驚かせる発言してくれた。

「この傭兵ギルド長、レイア・ステウスの名に賭けて、お前を立派な傭兵にしてみせよう」

前言撤回、これ以上の適任はいません。

衝撃の事実と試される話し（前書き）

今回はちょっと長めです

衝撃の事実と試される話し

ところ変わって現在僕は、この家にある道場っぽい建物に木刀を持ってレイアさんと対峙している訳で、道場の端の方にいるジャックさんが、

「二人とも頑張っ」

とか応援してるのを意識のどこかで、いやいや止めろよアンタとツッコミを入れている間に、

「では、行くぞ！」

と、レイアさんが僕と同じ木刀を構えてこっちに突っ込んできた辺りで、レイアさんの衝撃発言から今までのことが走馬灯のように思い返されていった。

じゃないと思うのは僕だけだろうか。そんなことを考えていると
「ではこれからの話しは、食事の時にでもしようか。そろそろ昼になるしな」

とレイアさんが言う。たしかに、思い出してみると昨日の夕食も今日の朝食も食べてないから、すぐくお腹が減っていた。

「そうですね。お腹減りましたし」

「よし、じゃあついてこい」

僕は部屋から出ていくレイアさんの後について行った。

レイアさんと僕が来たのは少し広めの部屋で、テーブルとイスや色々な生活に必要な家具があるとキッチンが一緒になったような部屋だった。

その部屋のキッチンに向かってレイアさんが声をかけた。

「客が起きたから、昼食の用意をしてくれ」

「はいはい、了解だよ」

その声に答えるように、キッチン方から返事がかえってきた。

「レイアさんって一人暮らしじゃないんですか？」

「ああ、私と夫の二人で暮らしだ」

へー、私と夫の二人暮らし。私と………夫？

「ええー！？」

やっぱり僕は驚いてばかりだ。

昼食がテーブルに運ばれて全員がイスに座ったところでレイアさんが僕のために、改めて皆で自己紹介しようと言った。

「まず私から。名はレイア・ステウス、傭兵ギルド長をしている。改めてよろしくな、シン」

「じゃあ次に、俺の名前はジャック・スティール、レイアの夫だよ。よろしくな」

「あ、はい、よろしくお願いします」

レイアさんとその夫のジャックさんがそれぞれ名乗ってくれた。

「えっと、僕の名前は藤沢真也、シンって呼んでください」

僕もとりあえずそう名乗っておく。その後にも僕達はお互いに色々なことを質問したりされたりして、僕も楽しく食事をしていた。

そう、ここまでは……

――――

昼食を食べ終わって少しの間くつろいでいた僕のところに、レイアさんとジャックがやって来て、レイアさんは僕にこう言った。

「シン、ちょっとついてこい」

「へ？どこか行くんですか？」

「まあまあ、とりあえず行こう！」

ジャックさんに腕を引っ張られて着いた先は道場みたいな結構広い部屋で、いきなりそこで木刀を渡してきたレイアさんに僕は、なんとなくこの後の展開を予想しつつ質問した。

「あのーレイアさん？今からなにをするんですか？」

するとレイアさんは、

「テストだ」

と一言言った。

やっぱり予想は当たってましたよ。

――――

そこまで思い返した辺りで、目の前にレイアさんの木刀が目の前に迫っていることに気付く。

「うわああ!？」

振り下ろされる一撃をぎりぎりで受け止め、とっさに相手の木刀をうち払う。

「ほう、なかなかやるな。ではこれはどうだ」

レイアさんは口元に不敵な笑みをうかべた後に、今度は連続で打ちかかってきた。

「おっ!？わっ!？うわ!？」

今度もまたきわどいところで全て防ぐ。ああもう、こんなことなら中学までやってた剣道もっと真面目にやってたらよかった。

「どうした、お前も打ってこい!」

そんなこと言われたって、どうしたらいいかわからないのですよ、受けるだけで精一杯なのですよ？

「来ないならば、こちらから行くぞ!」

そう言って地を蹴るレイアさん。その速度は今までより更に速い! クソッ、こうなりやもうどうにでもなれ!

振り下ろされた一撃を最小限の動作で回避して(偶然)、相手の隙を突いて自分の木刀を目を瞑っておもいきり振り下ろす。が、ある筈の手応えはなく、不思議に思って目を開けると、自分の木刀の刃の部分が根元から無くなっていた。

ハイ? どーなってるのしょうか?

家族になる話し

持っていた木刀がおかしなことになってることに僕は呆然としてしまふ。

「すまないシン、ついいつもの癖でやってしまった」

本当にすまなそうにあやまるレイアさん。と言うことはもしかして

……

「これレイアさんがやったんですか？」

「そうだが、それがどうした？」

そんな当たり前のように言われても、木刀で木刀を斬るって普通じゃないですよ？ まあこれが素人とプロの実力の違いってことなのかな。

「いやゝ凄かったよ。シン君、君って結構やれるじゃないか」

「そんなことないですよ。でも、レイアさんの強さは桁違いですね」苦笑しながら言う僕に、ジャックさんは自分のことのように嬉しうに笑う。

「そりゃあ俺のレイアだからね」

「こ、こらジャック！ 変なことを言うんじゃない！」

顔を紅くしてあたふたしているレイアさんを見て、僕もジャックさんも声を上げて笑った。

しばらくして顔の紅さもなくなったレイアさんが、右手を僕に出して笑顔で、「これから色々大変なこともあると思うが、この家に住んでる間だけでも私達は家族だ。一緒に頑張って行こう」

と、言ってくれた。僕はその手をとって同じように笑顔で、大きく返事をした。

「はい！これからよろしくお願いします！」

その日の夜、今まで寝ていた客間を僕の部屋として使っていいと言われたので、その部屋のベッドに僕は寝転んで、これからのことについて考えていた。

たしかにこれまでの生活とこの世界では違うことも多いし、不安になったり怖くなったりすることもあるだろう。あまり仲が良くない両親も急にいなくなったら心配すると思うし、なによりあの二人の幼なじみに会えなくなるのはかなり寂しい。でも、そんな想いの中にも確かに存在するこれからの生活に対する期待や希望を信じて頑張ってみようと、僕は思った。

傭兵になる日の話し（前書き）

主人公が異世界にきて半年たちやいました

傭兵になる日の話し

僕が不運にもこの世界に召喚されて、ゴミ捨て場に捨てられていたところを傭兵ギルド長のレイアさんに拾われてから半年くらいがたった。

この街ギルドタウンでの生活にも結構なれてきたし、レイアさんの超が付くほど厳しい特訓もなんとかついていけるようになって、この前のテストでレイアさんにやっと合格点をもらえた。

今までの苦労や努力を胸に秘めて僕は今日、傭兵になる。

――――

眩しい朝日が窓から入って、いまだに寝ている少年の顔を照らしている。

その少年、シンヤの部屋のドアが開いて、一人の男性が入ってきた。

「おいシン、起きなよ」

男性ことジャックはゆさゆさとシンヤの体を揺らす。

「んゝまだ眠いゝ。あと……五分……」

また眠ろうとするシンヤにジャックは苦笑する。

「今日はレイアと一緒に傭兵ギルドに行くんだろ？」

「傭兵……ギ、ルド？……！」

その言葉を聞いて、やっとシンヤの思考ははっきりしてきた。そうだった、昨日レイアさんに明日の朝ギルドに登録しに行くって言われてたんだった！

「先に行ってるから、早く来なよ」

そう言って部屋から出ていくジャックさん。僕はベットから出て急いで服を着替ながら、部屋の中を見渡した。

最初はベットしかなかったこの部屋も、今では僕の部屋としてちゃんと使われている。たった半年程だけど、この部屋には色々な想いが詰まっている。

例えば部屋の片隅に置いてあるタンスには、そんなにいららないと言っているのにレイアさんが次々に買ってきた服がいっぱい入ってる。ジャックさんの話しでは、新しい家族が増えたことが、顔には出さないけど嬉しいかららしい。

ベットの隣にある机では、この世界の文字を覚えることに四苦八苦した。この世界の言葉はなぜか理解できるのに、文字はさっぱり分からなかったのである。

そんなことを思いだしながら、着替終わった僕は部屋を出た。

レイアさんとジャックさんと一緒に朝食を食べた僕は、レイアさんとともに傭兵ギルドまで来ていた。

街の中心にして名前の由来にもなっているこの建物は、かなりの大きさがある。そんな理由もあってこの建物には東西南北それぞれ

に入口がついてる。僕達はその中で一番近い東口から入って行った。

「あ、ギルド長！おはようございます！」

「ああ、おはよう」

建物の中に入ると、レイアさんはいろんな人に挨拶されて、レイアさんも挨拶を返していた。なんと言うかこんな光景を見ると、ああやっぱりこの人は凄い人なんだなあと思ってしまう。そんなことを思いながらレイアさんの後について行っていると、受付らしきところに着いた。

「シン、ここが登録受付だ」

僕の方に振り返ってレイアさんはそう言った。

「ここで手続きをして、お前は正式に傭兵になる。」

その言葉を聞いて、僕は体を固くするほど緊張した。

そんな僕を見て、レイアさんは少し笑いながら優しく、

「そう緊張するな、お前の今までの頑張りはお前が一番よく知っている。」

そう僕に言ってくれた。その言葉を聞くと、今までの緊張が嘘のようになくなった気がした。

「うん、ありがとう」

僕も少し笑いながらお礼を言う。

「レイアさん、僕はこの後どうすれば？」

緊張もなくなった僕は、レイアさんにこれから何を聞いてみた。「それなんだが、本来ならまず実技試験があるのだが、シンの場合はそれは無しだ」

え、マジで？なんで？

「ど、どうしてですか？」

「ギルド長である私が一応は認めてやったんだ。それが理由にはな

らないか？」

なるほど、それもそうか。

「じゃあ僕はなにをするんですか？」

「実技試験の次にある、潜在属性を調べる儀式だ。」

えっと、たしか潜在属性ってのは、魂の中にある自分と相性のいい魔法の属性だったよな。

これくらいはジャックさんに教えてもらったさ！

ついでに言うと、僕に戦闘技術を教えてくれたのはレイアさんで傭兵に必要な知識を覚えてくれたのはジャックさんだったりする。

「儀式を行うのはこの受付の奥だ、私はここで待ってるから行ってこい」

レイアさんの言葉に頷いて、僕は受付

の人の後について行った。

傭兵になる日の話し（後書き）

たぶんまたいつか、主人公がレイアの姉さんに鍛えられてる半年間の話しを書こうと思います。

属性判明と登録完了の話し（前書き）

黒いローブの老人再び登場

属性判明と登録完了の話し

僕が案内されてやってきたのは、前にいた世界の学校の教室くらいの広さの部屋で、この部屋を中心あたりの床には魔法陣のようなものが描かれていた。

「ここが儀式の間です」

受付の人はそう言うと、僕達が入ってきた扉とは違うところにある小さめのドアに向かって、何やら話しかけていた。

そのドアから黒いローブを着た、背格好から老人だと思われる人物をみた瞬間、妙な違和感を覚えた。

（あれ、僕あの人のこと知ってるような気が……）

老人もそうなのか、皺だらけの顔にある目を大きく見開いて、

「お、お主は！？あ、あのときの！」

と、低い声で言った。

その声を聞くと同時に、僕はその老人のところまで行き、大きく拳を振りかぶりって……

「ぶべらああ！？」

その老人を殴っていた。

「な、なにをしているのですか！？貴方は！？」

受付の人が戸惑ったように声をあげる。その言葉を聞いて僕は、自分が何をしたのかわかった。

「え！？あ！す、すいません！でも、僕の頭の中の本能と言う部分で、この人を殴れと言っていたんです！」

そう、まるでこの人に何か恨みがあるように、コイツを殴れと体に訴えかけていたのだ。「何をわけの分らないことを言っているのですか！」

いや、そうとしか言いようがないのですが。

「よ、よいのじゃ、気にするでない」

あ、老人復活。

「し、しかし……」

受付の人は老人に説得されてようやく引き下がった。

「で、ではこれより儀式を行う。お主はあの魔法陣の中心に立っておれ」

「あ、はい。わかりました」

気を取りなおして老人がそう言ったので、僕は言われた通りに魔法陣の中心に立つ。その後に老人が何やらブツブツと呟いた後、魔法陣が強く光り始めた。

「わ!?! うわわ!?!」

その後に、急に力が抜けるような感覚がして、思わず声をだしてしまう。

魔法陣の光りが引いてきたころにはその脱力感もなくなって、普通の感覚に戻ってきた。

「では、彼の潜在属性を発表してください」

受付の人の言葉に頷く老人。

「お主の潜在属性、それは……闇じゃ」

闇、か……なんだか邪悪っぽいのですが……。

しかし、老人はその後にこんなことを言った。

「お主の闇は、光と共に人々に安心をもたらすような、そんな優しい闇じゃ。そしてそれは時に自らを守る強力な刃にもなる。お主の中に秘められた力を信じて、これから頑張りなさい」

その言葉に僕は頷き、お礼を言っておいた。

「ではそろそろ戻りましょう」

受付の人はそう言って儀式の間を出ていったので、僕も急いでついて行った。

僕が受付に戻ると、レイアさんはちゃんと待っていてくれた。

「どうだった？」

近くまで行くとそう尋ねられたので、僕はあの老人に言われたことをレイアさんに説明すると、
「なるほど、たしかにそんなイメージだな」

とのこと。ついでに言うところレイアさんの属性は地属性らしい。

「シン、登録に必要な書類は私が提出しておいた」

あれ？ どうしてですかね？

僕が疑問に思っていると、

「さすがに異世界からきたなんて書けないからな。私が適当に誤魔化しておいた」

レイアさんはそう小声で言った。本当に色々気が利くよ、この人は。僕達がそんなやりとりをしていると、受付の人はレイアさんの提出した書類を確認し終えたらしい。

「はい、書類の方も大丈夫です。これで貴方は傭兵の一員ですよ」

そう言われて、僕は初めて自分が傭兵になったことを自覚した。

ちよつと興奮気味の僕を見て、レイアさんも笑いながらこう言うてくれた。

「ようこそ、我が傭兵ギルドへ」

初依頼と出発の朝の話し

登録の終わった僕は、早速どんな依頼があるのかを見に行った。

依頼はその種類に応じて別々の掲示板に張り出されていて、主に討伐、採取、護衛の三つの掲示板があるが、それとは別に初心者用掲示板や超上級者専用掲示板等もある。

その中で僕は、初心者用掲示板を見ていた。いきなり難しい依頼を受けるほど自分の実力に自惚れてはいないし、レイアさんに言わせれば僕なんてまだまだ未熟らしいからね。

「うーん。初心者用って言っても結構種類があるんだなあ」

僕がどれにするかきめかねてしていると、

「これなんてどうだ？」

後ろからレイアさんが一枚の依頼書を指差した。

えっと、どれどれ。依頼主はシナ村の村長さんか。依頼内容は、村の近くにある遺跡にうっかり入れ歯を忘れたので取ってきてほしい？……………はぁ？

「こ、こんなのも依頼になるんですか？」

「ああ、初心者用の依頼はほとんどこんなものだ」

ほ、ほとんど入れ歯並……………シヨボすぎだろそれ……………つーか入れ歯を遺跡に忘れるってなんだよ！？

そんな僕の考えを察したのか、レイアさんは僕に説明してくれた。「たしかに依頼自体は簡単だが、あの村の辺りに入る魔物は初心者相手をするには少し手強いくらいだ。この掲示板の中では難しい

くらいだぞ」

な、なるほど、そうだったのか。……ん？どうしようかなあ。……よし、決めた！

「じゃあ、この依頼を受けます」

そう僕はレイアさんに告げた。

「ではあそこにある依頼受付にその依頼書を持って手続きを済ませてこい。手続きの仕方は担当の者が教えてくれるはずだ」

レイアさんに言われた通り受付カウンターまで行き、受付の人に声をかける。

「すいませーん。この依頼を受けたいんですけど」

その言葉を聞くと、受付にいた少女が反応した。

「あ、はい。それでは依頼書を確認させていただきます」

僕は少女に依頼書を渡す。その依頼書に何やら書き入れてから、

「ではここにサインをお願いします」

と言ってきたので、言われた通りサインする。もちろんこの世界の文字で。

「はい、全て確認しました。それでは頑張ってくださいね」

最後に依頼書を確認し終わった少女は、笑顔で僕に言ってくれた。

「うん、どうもありがとう」

僕も笑顔で答えて、受付を後にしようとした時、

「あ！忘れてました！」

と、少女がいきなり大きな声を出した。

びっくりして振り向く僕に向かって、少女は恥ずかしそうに、

「私の名前はエナって言います。この東依頼受付を担当していますので、これからよろしくお願いします」

そう自己紹介をしてきた。僕もその受付の少女エナに向かって、
「僕の名前はシンヤ、見てのとおりかけだしの傭兵だよ。こちらこそよろしく」

と、自己紹介して、僕は受付を離れた。

「依頼、受けてきましたよ」

少し離れた場所にいたレイアさんに声をかける。

「そうか、では今日中に準備を済ませて、明日の朝には出発出来るようにするぞ」

その言葉に頷いて、僕とレイアさんはギルドを後にした。

その出発の朝、僕はレイアさんの家にある自分の部屋で、荷物と装備のチェックをしていた。

「えっと、あれもこれもそれも入れたし、他は……特にないよな」

荷物はこれでバッチリだな。装備は……って言っても、普段の服とあんまり変わらないか。

僕が着ている服は、軽くて丈夫な素材で出来たものに魔法をかけて更に頑丈にした物で、レイアさんが僕にくれた物だ。

逆に武器は、どこにでもあるシンプルな鉄の剣である。これは僕が特訓の時に半年間使っていた剣で、かなり使い込んだ物だ。

うーん、他は特に何もないよな。じゃあそろそろ行くか。

僕は荷物の入った袋を持って、自分の部屋を出た。

レイアさんの家の前では、ジャックさんとレイアさんがわざわざ見送ってくれた。

「気を付けてな、危なくなったら迷わず逃げろよ」

「自信を持って、今のお前でもこれくらいの依頼なら簡単に達成出来るはずだ」

「うん、ありがとう」

二人の言葉にお礼を言っ僕は家を出た。

「いってきます！」

遺跡を調査する話し

ギルドタウンからでる馬車に乗って約四時間程で、目的のシナ村に到着した。

シナ村に入った僕は、早速依頼主である村長の家に行ってみた。

「すいませーん。傭兵ギルドから依頼を受けて来ましたー」

「おお！よく来て下さった」

村長の家で僕を出迎えてくれたのは、よぼよぼの老人（入れ歯無し）だった。この人が村長なのだろう。

「今からお主に向かつてもらいたいのは、この村から東に少し行っただころにある、常夜の遺跡とこよじゃ」

常夜の遺跡……すぐく何か出そうな感じがするな。そんな僕の考えに気付いたのか、

「安心してくだされ。あの遺跡は既に調査済みじゃから、特に危険なこともないはずですよ」

と、村長（入れ歯無し）は言った。

なるほど、それなら安心だ。

「じゃあ今から行って来ますけど、その入れ歯ってどこに忘れてきたんですか？」

「遺跡の一番奥にある祭壇を掃除した時に忘れてきたようじゃから、そこにあると思いますじゃ」

その言葉を忘れないようにしながら、僕は遺跡に向けて出発した。

その遺跡の祭壇に確かに入れ歯はあった。あったのだけど……その祭壇の奥にある壁が崩れて、更に下に続く階段があるのですが。ここが一番奥って言ってなかったけ？あの村長。

うーんこれはどうしたものか。……よし、ちょっと下まで行ってみるか。何かトラブルなら、村長さんに伝えた方がいいだろうしな。

そう判断した僕は、下へと続く階段に足を踏み入れた。

――――

「これで最後!!」

「ギイイイ!」

ふう、なんだって魔物がこんなにもいるんだ？

下に行く階段を降りた僕は、そこから更に奥へ続く広い通路を、時々遭遇する魔物を倒しながら進んでいた。

そして通路をしばらく進んで、やっと僕は遺跡の一番奥に到着した。

したのだが……

「誰だ、お主は」

いや、あなたが誰ですか？

続・遺跡を調査する話し

常夜の遺跡の本当の最深部はとても広い場所で、その中心には、一振りの剣が突き刺さっていた。

で、その剣の前に立ってこちらを見ている人が一人いた。低い声をしていたので、多分男だと思う。

服装は、袴はかまと胴着どうぎのような服で、腰には刀を帯剣おびけんしていた。

その人物は手を刀の柄にやり、こちらを警戒するように見ていた。さて、どうしたものやら。

とりあえず僕は、ここに来た理由を簡単に説明した。

「なるほど、傭兵か。我が名はザンキ。訳あってこの遺跡まで来た者だ」

その人物ことザンキはそう言って、一応警戒を解いてくれた。

「その訳ってそこに刺さってる剣ですか？」

「ああ、その通りだ」

僕の質問をザンキは肯定した。そりゃそうか、ここにはそれ以外なんも無いし。

「だが、どうやら無駄骨だったようだ。この剣は我とは相性が悪いらしい」

ザンキはそう言って残念そうにしていた。僕はその剣をもう一度よく見てみた。

日本刀のような反りが無い片刃の剣で、長さは刃の部分がだいたい一メートル弱位で柄も少し長めだ、十字の形をした黒い鍔の周りを金色の金属で縁取ってある。

うーん特に変わったところのない、いたって普通の剣に見える。僕が疑問に思っていると、

「この剣には精霊が宿っているらしく、その精霊が放つ波長と同調出来る者でないと触れることすら叶わん代物だ」

ザンキはそう説明してくれた。つか、手に入るかもわからない物を求めてこんな遺跡の奥まで来たのか、この人は。

僕も近付いて剣を見てみた。なんだか少し古い感じがする。かなりの間ここに刺さっていたみたいだ。

僕は好奇心で剣をとってみようとした。ザンキが何か言いかけていたが、少し遅かったようだ。僕の手は既に柄を掴んでしまっていた。

……………? 掴んでいた?

「って掴めてるじゃん!？」

なんか掴めちゃいました。

激闘する話し

精霊が宿っていて、波長が合わないと触ることすらできないと言われる剣に、なんと触れてしまった。

「え！あれ！？ど、どうしよう！？」

「とりあえず、抜いてみるがよい」

ザンキに言われた通りに抜いてみる。すると、剣の刀身が淡く光始めた。

「この剣の名は月光刃^{げっこうじん}。黄昏の武具の片割れだ」

また聞いたことのない単語が出てきた。

「なんですか、黄昏の武具って？」

「本来混じることの無い光と闇の属性を持つ武器のことだ。その月光刃は二つある属性の内、光より闇の力を強く持っている」

なるほど、よくわかった。よくわかったけど、どこでそんなことを知ったのだろうかこの人は。まあ、気にしても仕方がないけどさ。で、僕はこれをどうしたらいいのかな……。

そんなことを考えていると、

「お主、名はなんと言う？」

と、ザンキに聞かれた。そう言えばまだ名乗ってなかったな。

「僕はシンヤって言います」

「ではシンヤ、お前に頼みがある」

いきなりなんだろうか？

「その剣で我と戦って貰いたい」

「ハイイ！？」

何を言ってるのですか！？この人は！？

「我はその剣を手に入れることは叶わなかったが、せめてその剣の力を知りたいと思うのだ」

「へ！？えええ！？」

いやいや困りますよ、そんなこと言われても。

「では行くぞ！！」

「なんでえー！？」

抜刀しつつ斬りかかって来たザンキの刀を、月光刃で受ける。

！？凄い軽い！しかもさっき手に入れたばかりなのに、凄く手に馴染む。

次々にくる斬撃を全て弾いて、逆にこちらから連続して斬りかかる。一進一退の攻防を繰り返していると、突然ザンキが後ろに大きく跳んで距離をとった。

「なるほど、その剣の力もだがお主もなかなかやるようだ」

「お誉めに預かり光栄だね」「私も少し本気を出させてもらう」

あれで本気じゃ無いのか！？

僕はどこから攻撃が来てもいいように、剣を構え直して警戒する。
そしてザンキが地を蹴ったと同時に、一瞬その姿が視界から消える。

待て、落ち着け、これは多分魔法を使った超高速移動だ。神経を研ぎ澄まし、魔力の気配を感じ取ればいい。

……………そこだっ!!

ガキィイン!

金属同士が打ち付け合う音が、辺りに響く。

僕が振り向きざまに振るった剣は、後ろから振り下ろそうとしたザンキの刀を受け止めていた。

「本当にお主…いや、シンヤは出来るな。この一撃を受け止める者はそう多くないぞ」

そう言うときザンキは刀を鞘に納めた。

「しかし、これ以上はお前でも着いてくることは難しいはずだ」

……ザンキの言う通りだ。あの一撃を受けるくらいなら、この月光刃と今の僕の実力があればなんとかなるけど、ザンキまだ本当の実力を出しきっていない。

ザンキは、構えを解いた僕に向かって、

「シンヤ、お前の実力はまだまだ延びる。自らを鍛え、その月光刃

を使いこなせるようになった時、我はお前と全力で戦おう」

と、その瞳に何かを期待するような光を宿しながらそう言って、遺跡を後にした。……何か勝手に約束されちゃったんですけど。

僕は大きく溜め息をついた。やれやれ、初めての依頼はトラブルだらけだったな。

「いつまでもここにいたってしょうがないか……よし、じゃあ外にでぐえ!？」

外に出よう、と言おうと思ったら、今度はいきなり上から何か落ちてきた。

「ふわぁ〜よく寝たよ〜」

僕の上に落ちてきたのは、眠たそうにしている女の子だった。

もう、厄介事は勘弁してくれ……。

秘剣を入手する話し

ザンキとの戦いを終えて遺跡から出ようと思ったら、今度は僕の上から女の子が落ちてきた。どーなってるのでしょうか、いったい。

「とりあえず、退いてください」

僕は上に乗っている女の子にそう呼び掛ける。

「え!?!どこどこ?」

しかし僕に気付かず、どこにいるの、と 辺りを見渡す女の子。
……………これってわざとですか? わざとなんですね!

「あっ、こんなとこにいた!」

で、今更のように気付く女の子。…………まあ今回は、そのボケっぷりに免じて許してあげよう! 嗚呼僕ってなんて心が広いのだろうか!

次々起こるトラブルに、シンヤの精神耐久力(MP)は限界の一步手前だった。そして……

「入れ歯取ってくるだけだったのに!!」

と、思わず人目も気にせず叫ぶ。女の子が驚いたようにしていたが、これくらいやらなきややってられるか! こんちくしょー!!

はッ!?! い、いかん。落ち着け、冷静になるんだシンヤ。深呼吸

しろ、深呼吸。

ふう、ようやくいつもの調子を取り戻してきたぞ。

精神耐久力（MP）を小量回復した僕は、早速女の子に話を聞いてみることにした。

「君は誰？どこから来たの？」

その質問に女の子は、

「私の名前はツクヨミ。その剣の中から来たんだよ」と、答えて下さった。

……と言うことはもしかして、もしかすると…

「君ってもしかして精霊さん？」

「うん、そうだよ！」

ツクヨミは笑顔で頷いた。い、いいのか？そんなあっさり肯定して。

そんな僕の疑問をよそに、精霊ツクヨミは僕の持つ月光刃を指差して、

「それ、貴方が抜いたんですか？」

と、聞いて来た。

「え、そうだけど。それがどうかしたのか」

僕がそう答えると、突然ツクヨミは僕の両手を握りって、

「ありがとうございます。実は私、あの中に閉じ込められてたんです」

と、涙目でお礼を言ってきた。う、ヤバイよ。よく見るとめっちゃ可愛いよこの子。腰に届きそうなくらいある黒髪に可愛い顔、背は僕より頭一つ分低いくらいで（僕の身長は175cm）、とっても起伏の豊かな体をしている。着ている服は着物みたいな服だった。

そんな可愛い女の子が、僕のことをウルウルした涙目で見つめているのデスよ!？

小量回復した精神耐久力（MP）は、一気にレッドゾーンまで削られてしまった。

クッ、落ち着け!平常心だ!平常心!

「そ、そうだったのか。で、でも、閉じ込められてたってどう言うこと?」

なんとか、心を平常に保った僕は、気になったことをツクヨミに聞いてみた。

「えつとですね、実はその剣、まだ未完成なんですよ」
「なぬ、マジで!？」

僕はあの剣を使ったから分かるけど、あれほど軽くて使いやすい剣はそんなに多くないと思う。

僕が疑問に思っていると、ツクヨミが説明してくれた。

なんでも、黄昏の武具に限らず精霊が宿った武器やら道具は、精霊の同意を得てその中に入って貰い、その精霊が認めた人にだけが使うことを許され、その精霊固有の能力を使えるらしい。

でもこの月光刃は、本人曰くふらふらと散歩をしていたツクヨミを勝手にその中に封じてしまったらしく、突然見知らぬ場所に封じられたツクヨミはそこから出ようと力を使いまくってたが、ツクヨミの力は月光刃を通してその周りの物を無差別に破壊してしまい、危険だと思った製作者は月光刃をこの常夜の遺跡の最深部に封印してしまって、ツクヨミは完全に閉じ込められてしまった……。と、ほとんど泣きながらツクヨミは説明してくれた。

僕はそのツクヨミの肩を励ますように叩く。

「わかる、その気持ちとってもわかるよ！」

「わかってくれますかあ」

ああ、分かるとも。僕だって訳も分からずこの世界に召喚されてしまったのだから。

ツクヨミは、流していた涙を拭って笑顔で僕にこう言った。

「私、貴方とならうまくやって行けそうな気がします。もしよかったらこの剣、貴方が使ってくれませんか」

僕はほんの一瞬だけ考えて、

「わかった。よろしくな」

笑顔でそう言った。

――

遺跡を出て無事に入れ歯を村長に渡した僕は、あの遺跡で起こった出来事を話して、どうにか月光刃を譲って貰えないか村長に言ってみた。

すると村長は、あっさりそれを承諾してくれた。

「この村は平和なだけが取り柄のほんに小さな村ですじゃ。じゃからそのような物騒な物は、お前さんが使っておくれ」

そう言って村長は僕に月光刃を託してくれた。

「はい、ありがとうございます。大事に使わせて貰います」

「ありがとうございます」

僕とツクヨミは村長にお礼を言って村を後にした。

色々トラブルもあったけど、僕は初依頼をなんとか完遂できた。
ホント、疲れたなあ……。

冷たいアレの話し（前書き）

更新がかなり遅れました。これからはもうちょっと早く更新したいです。

冷たいアレの話し

シナ村を出発して数時間、僕とツクヨミを乗せた馬車はギルドタウンに到着した。

「やっと帰ってこれた…」

本当に疲れた……早く家に帰って休みたい……。けどなあ、どうしようかなあ、アレ。

「ほえー、すごいですねえ。こんな大きな街には初めて来ましたよ！」

まるで初めて都会に来た田舎の人みたいに周りを見ているツクヨミ。

連れて来たのはいいけど、レイアさんとジャックさんになんて説明しよう。

「シンヤさん！シンヤさん！あれなんですか！？」

そんなことを考えていると、ツクヨミが何かを指さして僕にそう言ってきた。その指の先には一つの屋台があり、看板には大きな文字でアイスクリームと書かれてある。

「へえ、この世界にもアイスクリームなんてあったんだ」

ちょっと以外だ。地球にあった食べ物がこの世界にもあるなんて。

「あいすくりーむ？それってどんなものですか？」

「ん、冷たくて甘い食べ物」

まったく説明になってなかったけど、興味があるのかツクヨミはそれを聞いて一度屋台の方を見て、次に僕を見上げて、

「あれ、ほしいです」

と言ってきた。僕は少し考えてから、僕自身もこの世界のアイスクリームに興味があるので、買ってみることにした。

「じゃあ、ちょっと行ってみようか」

「ホントですか！やったあ！」

はしゃぎまくるツクヨミと一緒に屋台までやって来た僕は、ツクヨミは何味がいいか聞いてみた。

「えっと、えっと、じゃああのピンク色ので！」

「ストロベリーな、じゃあちょっと待ってて」

店員にバニラ一つとストロベリー一つを注文してそれを受け取った僕は、ツクヨミにストロベリーを渡して、自分のアイスを早速食べてみた。

「ん、やっぱりあんまり変わらないね。どうツクヨミ、おいしい？」

「はい！とってもおいしいです！」

そう言って幸せそうにアイスを食べるツクヨミの顔を見ると、

買って良かったと思った。

――――
アイスを食べ終わった僕達は、現在レイアさんの家の僕の部屋にいた。

覚悟を決めていざ帰ってみると、家には誰もいなかったからだ。多分買い物にでも行ってるのだろう。

することも無いのでベットのの上に寝転んでぼーっとしていると、だんだんと眠くなってきた。

「ツクヨミ、僕ちよつと寝るけど、誰か帰ってきたら起こしてね」

「あ、はい！わかりました」

よし、レイアさんかジャックさんが帰ってきたら、ツクヨミが起してくれるだろうし、これで安心して寝ることができる。

「じゃ、おやすみ」

僕はそう言って眠りについた。この後に自分がどうなるかも知らずに。

ザンキの正体の話し

ドゴオツ

「へぶっ!？」

物凄い衝撃を頭に受けて、僕は眠りから強制的に覚めた。

痛む頭をさすりながら僕を起こした人物の方を見てみると、そこには珍しく怒りをあらわにしたレイアさんがいた。つーかなんでそんなに怒ってるのだろう？

「おはようございます。それで、なんで僕は殴られたのでしょうか」

僕はただ寝てただけなのに。それと、ツクヨミはなんで起こしてくれなかったのだろうか？

「ほう、お前は自分が今どのような状況にいるのかわかっていないようだな」

「状況って言ってもただ寝てただけ……け………」

そこまで言うてようやく、僕はその原因を発見した。

「スウ、スウ………」

なんと、僕のすぐ隣にツクヨミが寝ていたのである。い、いやー困ったなあ、ハ、ハハハ……。

思わず引きつった笑顔でレイアさんを見ると、その鋭い視線で急に説明しろと無言の圧力を僕にかけていた。普通にコワイです。僕は必死になって説明した。遺跡であったことやツクヨミのことなどを、そりゃもうこれ以上無いくらい必死になって説明した。怒ったレイアさんほど怖いものは無いのだ。

僕が一通り説明したところで、ようやくレイアさんは普段の表情に戻ってくれた。なんとか危機は脱したというわけだ。

「ふむ…まさかあの遺跡にそんなものがあつたとはな、それにお前はあのザンキとまで戦ったのか、大変だっただろう」

「そりゃあもう死ぬかと思いましたよ。ってかザンキのこと知ってるんですか？」

「ああ、あいつは私と同じギルド長候補だったからな」

マジで！？スッゴい意外だ。つーかギルド長って何人かの中から選ばれるものなんだ。

「あいつは剣の腕は立つがあのような性格だからな、自分には向いてないと思い自ら辞退したのだ」

「たしかに、どちらかと言うと一人の方が似合いますね」

まさかそんなすごい人だったとは、つーか僕はそんな人とまた戦う約束をされてしまったのか。ああ…困った……。

「まあ、あいつのことは今はいいだろう。それより、ジャックの前

であいつのことは話さない方がいい」

「え、ジャックさんとザンキって中悪いんですか？」

「ん、ま、まあ色々あったんだ。それよりもうすぐ食事の時間だ。早くこいよ」

早口でそう言っ僕の部屋から出ていったレイアさん。いったいジャックさんとザンキはどのような仲なのか？

気になることも色々あるけどとりあえず今は……………。

「いい加減起きろっ!!」

「ふええっ!？」

この役に立たない精霊を起こさなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777b/>

気ままな傭兵暮らし

2010年10月15日00時41分発行